

留学生センター運営委員会各学部代表委員からのメッセージ

企画にあたって

留学生センター 畝田谷 桂 子

留学生センターでは平成15年度を締めくくるにあたって、留学生センター運営委員会に各学部代表として参加し、センターの運営に携わってくださった委員の皆様、留学生や留学生センターに関する所感を御自由に書いていただくようお願いしました。お忙しいスケジュールの中、心よく原稿をお寄せ頂いた委員の皆様、心から感謝の意を表したいと思います。

留学生（受け入れ、派遣を含む）問題が留学生センターだけで自己完結的に解決する問題でないことは自明の理です。留学生センターは、この認識を学内に広め、このことに関わる全ての人々と協力関係を築き、ともによりよい環境を整えていく必要があると認識しています。その中で、運営委員の方々、留学生問題に対する上記の認識やセンターの活動を各部局に伝えて下さる「橋」となって下さっています。そのようなお立場から所感を書いていただきましたが、お寄せ頂いた原稿は、どれも大変内容と見識を備えた重みのあるものでした。改めて留学生問題が全学の協力の上こそ改善されるものであり、多くの人に関われば関わるほど、英知が結集されるということを証明する寄稿となったと自負しています。どうぞ御一読頂いて、このような私の感想について、御一考下されば幸いです。

【留学の勧め】¹

運河の手摺

法文学部 橋 本 直 樹

6年前にオランダに参りました。文部省の在外研究員としてアムステルダムに10カ月滞在しました。滞在許可やIDカードの取得、住民票の登録、銀行口座の開設等、結構面倒なこともありましたが、やはり得るところは大です。教育研究関係は無論ですが、長期に滞在してみて初めて分かるということが多くあります。その一例をご紹介します。

昨春、ある雑誌に「安全第一“手摺”だらけの日本」という表題の論説がありました²。日蘭の文化比較で、運河が「象徴的な事例」としてこんな風に引き合いに出されています。

「オランダへ行き、首都アムステルダムの運河をながめ、驚かされたことがある。運河の様子が、日本とはぜんぜんちがうのだ。……運河のとなりには、人間の歩く歩道がある。だが……歩道と運河の間には、遮蔽物がおかれていなかった。」「日本だと、運河とそれに接した歩道は、たいて

い手摺で分けられている。」「日本では、歩道から運河に転落する人が、ほとんどいない。手摺の存在が、それをくいとめている。」

その通りですが、ここから次のように自己責任の話にまで持っていくのはどうでしょうか。

「アムステルダム……の運河沿いは、ほぼ全面的に開放されている。安全対策らしい配慮は、あまり見られない。人があやまって落下しても、当人の責任ということで、かたづけられるのだろう。子供が落ちても親の管理が悪かったということで、すまされる。それだけ、自業自得という観念がゆきわたっているのではないか。」「ようするに、日本の都市はおせっかいなのである。人民ひとりひとりを、自己責任のある大人だとはみなさない。子供をあつかうかのうように安全面では気をくばっている。」

信じてしまいそうになりますが、長期滞在での知識があるとなかなかだまされません。

オランダでは小学生のうちに全員泳げるようにしてしまいます。着衣水泳で、運河に落ちた時、自力で岸に泳ぎ付くあるいは立ち泳ぎ等で救助が来るまで持ちこたえられるようにするのです。万一授業だけで足りないときは自宅まで水泳指導員が押し掛け最寄りの場所で覚え込ませるとか。手摺を設けて落ちないようにするのではなく、落ちてでも助かるように、オランダでも「安全対策」をしっかりと採っているわけです³。指導員が押し掛けるのですから、大変「おせっかい」でもありません。確かに文化の違いなのでしょうが、これはおせっかいな子供の国日本と自己責任の大人の国オランダというのではありません。世界は神が造り賜うたが、オランダだけはオランダ人が干拓して造ったといわれる運河だらけの国ですから、そのすべてに手摺を設けることなどそもそも無理な話です。

17世紀に英蘭は鎬を削っていましたが話半分を受けとる必要があるものの、割り勘は英語でダッチ・トリートなどといいます。それで、泳ぎを覚えさせるのと手摺を置くのとコスト計算したのだろうなどと言う人もいるようです。もしそうだとすると、公共事業浪費大国日本と実質重視節約の国オランダという文化比較にでもなるのでしょうか。

さて、この話が本当かどうか、あなたも留学して確かめてみませんか。

1 法文学部では、新入生オリエンテーションの際、10分程で留学生センター運営委員会委員が「留学の勧め」を話します。その2004年度版（未定稿）を委員の仕事の一具体例としてご紹介します。

2 『週刊 エコノミスト』2003年5月13日号、70～72ページ。引用文中の下線は橋本による。

3 オランダの小学校での着衣水泳に関しては、皆越尚子『オランダ雑学事情』（彩流社）43ページ。

留学生受入れ派遣雑感

教育学部 濱崎 孔一廊

留学生センターには、設立準備段階から関わってきた。留学生に関する問題に詳しいわけでもないが、本委員会の委員を務めてきたお陰で私自身大変勉強になった。留学生センターの先生方や関係事務官の熱心さにはいつも頭が下がるばかりで、とても意見を述べるような立場にはないが、本年度をもって本委員を交代することになったので、留学生に関する問題についてこれまで感じたことを思いつくままに記してみたい。

最近、日本語・日本文化研修留学生（日研生）と教員研修留学生（教研生）の受入れについては文書でやりとりするようになったが、以前は、東京に各大学と文部省（当時）の担当者が集まり、各国からの留学生をどの大学に割り振るかを定める会議が行われていた。この打合せ会に参加したことがある。ここで一番驚いたことは、事前に作られた割り振り案に応じられないという大学が出てきたとき、複数の大学が名乗りを挙げて「是非その分はうちで引き受けたい」と留学生の奪い合いになったことであった。学部では留学生の受入れに理解を示してくれる教官もいないわけではないが、その数は少なく、できればあまり関わりたくないという方が多かったように思う。一部の他大学の留学生受入れに対するこうした積極的な姿勢と自分の学部の現状認識の違いに戸惑いを感じたことを思い出す。もちろん、現在では学部の国際交流委員会もでき、受入れ態勢も徐々に整ってきたし、学部で積極的に交流を図ろうとする動きも出てきてはいるのだが、しばらく前までは、教研生の受入れ指導教官に名前を連ねていても、いざ受け入れる段になると、この程度の日本語力では受け入れられないと言われる方が多く、説得するのが大変であった。

私自身も日本語・日本文化の専門家ではないが、日研生の受入れ指導教官になったことが一度だけある。いざ引き受けてみると、わざわざ日本までやってきて勉強しようというだけあって、大変熱心な留学生でこちらの方がいろいろと勉強になった。こういう留学生とうちの学生を交流させない手はないと思い、うちの学生との交流の機会を作ったのだが、これが失敗に終わった。留学生が言うには、「日本人の学生は、授業が終わってから授業の内容について話し合おうとしても嫌がる。それに話す内容がテレビ番組のこととか、彼氏・彼女のことばかりで幼稚すぎる」と言うのであった。ただ単に学生に任せるのではなく、適切なコーディネートをやるべきだったかと後で反省することであった。

一方、学科の学生を海外に派遣して思うこともいろいろある。帰ってきた学生と話していて一番思うのが授業のあり方の違いである。うちの学生がいく大学では各学期4科目までしか受講を認めない。1回の授業は60分でみっちりやるし、週に2～3回授業がある。したがって、休講などによって2週間ほど授業がないなどということはある。また、予習や復習にかなりの時間を割かなければならないので、4科目の授業といえども学生は大変である。しかし、それだけ力がつ

くということも実感しているのので、学生は喜んでいる。こういう教育を受けてきた学生は、鹿大での授業にももっと改善の余地があると思っているはずだが、こちらがかなり踏み込んで聞かない限り批判がましいことは口にしないのである。鹿大でもFDの取り組みも行われているがまだまだやらなければならないことは多いと感じる昨今である。

想うこと　－留学生センター運営委員として－

理学部 早川 勝光

2002年4月から2004年3月までの2年間、留学生センター運営委員会の委員を務めることになった。2002年は入試・就職関係委員会を主催する必要があり、それらの委員会と重なることが多くて欠席が多かったことをまずお詫びします。留学生センターの職務内容についての知識が極めて少ない委員であった。2003年には修士課程の留学生を研究指導することになり、留学生センターのお世話になった。留学生センターの活動の詳細は本報告書に記されているので、理解不十分な小生が記す必要はない。留学生センターの先生方や留学生センターを支える学部所属の先生方の、ご尽力に感謝申し上げつつ、とりとめのない「想うこと」を記して委員最後の義務を果たします。

欧米に比べて海外から日本への留学生が少ないことを憂慮して、文部科学省が留学生10万人計画を打ち出して以来、留学生数は年々増大し本年にはその目的を達することができた。数は達成できたが、留学生の質となると玉石混淆で必ずしも日本の大学教育のレベルについて行けない上、アルバイトに励んで学力の向上が疎かになる、あるいは、アルバイトで稼ぐことが主目的であるような留学生も増加し、社会問題まで引き起こしている。そこで今後は出身大学での成績が上位の者だけを入学させるようにとの通達が本省から出された。確かに「学力優秀、研究熱心」とは限らない多数の留学生を近くに発見する。「学力優秀な留学生」という小生の先入観は大きく変化してきている。必ずしも優秀とはいえない留学生が増えればそのためのケアや教育に多くの人員や経費を投入する必要が生じてくる。鹿児島大学では留学生センターがその任務を担っているし、留学生から頼りとされる組織となっている。これは、専任教員や支援教員の尽力に負うところが大きい。少人数で実施されることによって日本語教育はかなりの成果を挙げ、小生の指導留学生の日本語能力は1年で大いに進歩した。小生の気持ちには、どちらにとっても第2外国語である英語を通して日本人学生が彼と会話する訓練の場となることを期待するところがあった。残念ながらそのような波及効果は現れていない。日本人学生にも少人数での英語教育を行ったら、海外を目指す学生も増加するのかもしれない。

留学生センターでは、日本人学生が海外へ留学するための支援も行っている。インターネットで居ながらにして海外情報を得られる今、もっと英語に親しんで欲しいと思うし、留学生センターの留学説明会に参加して情報を得ようとする好奇心は持って欲しいと願っている。小生が指導する大

学院生には海外で開催される国際会議で発表することを奨励し実施してきた。その経験は英語学習のモチベーションを高めるが、本来は発表前にその力をつけるようにしていたら学問・研究のモチベーションのためにもっと好ましいことと考えている。

九州大学の国際戦略においてはアジア重視戦略で臨んでいるとのことである。鹿児島大学も焦点を絞って、本当に優秀な留学生をリクルートするとともに、鹿児島大学からの留学生を送り出すような「戦略」をもつことも個性輝く大学になるには必要かもしれない。

雑 感

工学部 寺 田 教 男

本年3月まで2年間、留学生センター運営委員会に加えさせていただきました。センター業務についての知識が少なくお役にたったとはとても思えませんが、私自身が鹿児島大学に着任してからの期間のほぼ半分を占めるとともに外国人留学生・研究者にとって様々な支援が必要なことを実感した、印象深い委員会でした。

前任地であった研究所でも外国人研究者と多少の付き合いはあり、欧米、大洋州や旧東欧、中国、インド、パキスタンなどの研究者と仕事をしていました。彼等は日本の研究現場に参画し業績を挙げるといふ比較的単一な方向を指向していたのですが、得ようとする技術・業績のレベルに応じて、訪問者～技術指導～期限付き職員としての雇用など複数種のプログラムが用意されていたことを記憶しています。現在、私が大学で接する留学生の出身国の数は前任地より少ないのですが、学生の来日時点での学問的水準に違いがあること以外にも、経済的条件、将来の人生設計など、様々な面で非常にバラエティーに富んでおり、習得あるいは母国に持ち帰ろうとするレベルも単なるキャリアパスとしての学歴の取得から教育・研究者として自立するための実力・実績の獲得まで大きな幅があると感じています。留学生センターにより実施されているレベル別の日本語教育や日韓共同理工系学部留学生に対する予備教育などは来日時の日本語、基礎学力の幅に対応したものでありますし、先般、提案された「スタディージャパンプログラム」は学術交流協定校から来日する短期留学生のうち日本語のレベルが上級に至っていない学生に対するケアが提案の背景であり、日本語・日本文化教育の面で留学生の多様性に応じる本学独自の取り組みの魁となるものと個人的には捉えています。語学、日本文化といった留学生から観てエキゾチックな分野に限らず、多くの分野でマルチな出口を用意することにより、特にアジア諸国において鹿児島大学へ留学を希望する学生の範囲が広がるのではないかと感じた次第です。

在任期間中、勉学以外の部分に関して、公的財団である鹿児島県国際交流協会が留学生の住宅の賃貸借の連帯保証人として機関保証する制度の発足という、留学生・受け入れ例の両方にとって有益な進展がありました。留学生センターや関連部局による留学生のニーズの把握・アピールが、こ

れを実現するための原動力の一つとなったものと理解しています。今後も、留学生子弟の教育機会の拡充など、このような先進的取り組みが進展することを願っています。

少人数の研究者相手であれば彼等の希望に個人レベルで対応できたので、着任当初は留学生に関しても同様に対処できるのではと安易に考えていました。委員会に参加してみて、相当数の留学生の多様なニーズに応じるには担当する人員の確保のみならず、関連規則との整合性・修了認定基準の検討など処理しなければならないことが数多いことを認識しました。これらを乗り越えて、いくつものプログラムが実施されているのは留学生センターおよび関連スタッフの方々の尽力に負うところが大きいことを付け加えさせていただきたいと思います。

手ぶらの帰国

農学部 佐藤 宗治

「やはり大学をやめます。お世話になりました。私は、指導教授に人生をめちゃくちゃにされただけです。これ以上我慢してここに残る理由を探すことができません。」卒業の喜びと光に満ちた姿のある一方で、学位をとることができず影に隠れている学生もいる。「大学院のみが鹿大の活きる道」とのミニ東大化礼賛の風潮が引き起こしてきている、学生を道具化した業績稼ぎや権力主義、こういった教官の己の虚栄心を満たしているに過ぎない行為が原因で起こっているのではないかと思われる不幸な出来事に、留学生の相談を通じて遭遇するようになってきた。

「私は、それなりの専門知識があって日本に来た。修士からやり直しました。」修士論文の一部を指しながら、「ここが、指導教官が書き直した部分です。一方的修正で自分の主張を聞いて貰えませんでした。」また、投稿論文の原稿を前に、「レフリーが指摘しているこの所は、指導教官が修正加筆した部分で、私は従うしかなかったのです。実験した本人として、科学者としてこのように変更することには耐えられませんでした。が、そうしないと、投稿させてもらえなかったのです。指導教官に提出後長い間無視された上こうです。」もちろん、留学生の思いこみ、努力不足という点も多くの場合にある。学生の一方的な主張の場合もある。しかし、大学院指導教官側に、その業績に相応しい教育者としての責務を果たしていないと思われるケースも存在することは確かだ。

大学院の規則に明記してある事項が満たされないと当然学位は授与されない。しかし、そこに至る過程で問題が起きた時に学生を救う術は殆ど無い。学術的な面で意見の相違がある時や指導に問題が生じた時、学生がクレームを述べる場が無い。学生の主張と指導教官の主張の双方の意見を聞き判断する第三者の組織なり仕組みが無い。退学、転校の決断が早い学生ばかりではない。立場上、そのような事が不可能な者も多い。

欧米ではどうだろう。善し悪しは別として、入学に学部成績に関して一定以上の水準が求められ、米国では GRE 等の成績も合否にひびく。留学生なら、さらに TOEFL も学部以上の水準が求め

られる。入学後も授業とその試験があり成績を維持し続けないと退学させられる。学位論文の審査の前には複数科目からなる専門試験がある。これで落ちる人は結構いる。一方、学生側は、指導教官に不満があればどの段階でもクレームを主張できる。教官との意見の相違がある場合には双方の主張を聞いて調停してもらい、適正に指導教官を変更できる場が大学に用意されている。そして、大学から割り当てられた専門分野外の教官も審査委員会に加わるので審査の視野は広い。だから、哲学博士となる。一方、鹿大の審査は、専門分野だけの委員による審査が主体で、本質的には内輪といって良い。

日本は、独立法人化に際して、deregulation という用語を使い自由化した大学を理想に据えた国を模範とした筈である。しかし、現実には、その訳語が National University Corporations と化けている通り、お役人が直接経営する企業化である。学生も、教職員も一方通行の権力の力学に縛られ、判断力を失い、人間性不在の大学に変貌しようとしている。そんな所で人が育つわけがなかろうと思う。

再びこの4月輝く目を持った留学生が入ってくる。私は、微力ながら、彼らが、権力に酔いしれ強欲に魂を侵された人々の手で、虚ろな瞳を持つ不幸を背負うロボットにされてしまわないよう手助けをしたい。皆様のご協力をお願いいたします。

あるフィリピン人留学生の20年

水産学部海洋センター 野 呂 忠 秀

フィリピン人留学生Sさんを知ったのは20年前のことでした。大きな黒い瞳をキラキラさせた小柄な彼女は、水産学部でエビ養殖の研究をしていましたが、研究室が違うこともあって、私とは廊下で会った時に挨拶を交わす程度の知り合いでした。

その後、彼女と本当に話をしたのは、留学生会館のロビーでのことでした。事務室の電話の前で泣いていた彼女を不審に思い声をかけると、

「神父をしている兄がマニラ郊外で交通事故のため亡くなった報を電話で受けたばかり」

とのことでした。その後の彼女の落胆振りは大きく、修論を書き上げた直後に大学病院で受けた乳癌の手術はそれに拍車をかけるもので、既に決まっていた北海道大学大学院博士課程への進学を諦めて失意のうちに帰国したことを、当時私は学生の噂話で知りました。

数年後、海外出張中の私がマニラのアヤラ通りでこのSさんに会ったのは偶然でした。いぶかしげな表情でこちらをじっと眺めている彼女に近づいて、

「鹿児島にいたSさんではないですか」

と話しかけると

「野呂先生、お久しぶり？」

という返事が日本語で返ってきたのには驚きました。

その夜彼女の叔母さんの家に招待された私は、彼女が鹿児島大学で修士を取ってからマニラに戻り社会的に恵まれない人の為に働こうと決心したこと、留学前に勤務していたフィリピンの大企業サンミゲル社の水産事業部を辞めて、孤児や貧しい人々のために教会で奉仕活動をしているが現実の厳しさの前でややもすると意気消沈しそうになること、といった話を聞きました。Sさんの誘いで彼女の働くその孤児院を訪れた私は、高齢の日本人シスターと知り合いになりました。太平洋戦争の前にマニラの日系商社で働く両親から生まれ、戦争で孤児になったままフィリピンで育ったこの老シスターは、もう日本語が全く理解できず、私が招待した日本レストランで、「日本料理などもう何十年も食べていない、日本の味はこんなだったかしら」と悲しそうに英語で話してくれたものでした。

その後もフィリピン出張のうちにSさんに電話をすることがありましたが、それも途切れがちになり十年余りの日々が過ぎ去りました。この間にSさんが再びサンミゲル社に復職しエビ養殖の技術者として働いていたことや、やがてその水産部門が閉鎖され彼女も退社を余儀なくされたことは風の便りとして聞いてはおりましたが。

久しぶりに出張先のマニラでSさんと会うことができたのは去年の夏でした。マニラのホテルに四輪駆動車を運転して現れた彼女は既に50歳半ばの堂々たる女性で、鹿児島時代の留学生の面影はどこへやら。

サンミゲル社の退職金を元にテイラピア（淡水魚）の孵化事業を始めたところそれが見事に当たり従業員20名の会社になったこと、会社設立後5年で借入金も返済し今は順調に純益をあげていること、女性の会社創業者としてフィリピンのテレビにたびたび出演していること、その分野の専門家としてマレーシアやオーストラリアのセミナーに請われて講演に出かけていることを淡々と話す彼女は、既に会社社長としての自信に満ちたものでした。また、会社の純益は従業員で平等に分けていること、会社の実務は既に従業員に任せ、午前は会社の社長、午後は孤児院のボランティアで働いておりそれが生き甲斐であるとのことでした。

彼女が孤児院に興味を持ったのは、日本留学中に偶然訪れた孤児院の経験がきっかけであることも、今回始めてSさんから聞いたことでした。留学中に自らの生き方や母国の現実に思いをはせることができる環境を整えることも、留学生のためには大切なことなのかもしれないとは、Sさんを見て感じることでした。

留学生センターとの関わり

保健管理センター所長 森 岡 洋 史

私が、保健管理センターへ着任したのは、平成10年の4月でしたから、この4月で、かれこれ6年になろうとしています。今でこそ出席しなければならない委員会が多くなりましたが、当時出席する委員会は、この留学生関係と、総合教育研究棟関係の2つだけでしたので、留学生センター運営委員会は、私にとっては、付き合いの長い、なじみ深い委員会です。当初は、留学生交流委員会とか称していたような気がしますが、留学生とは、風邪や怪我などを診るだけの付き合いでしたので、留学生の教育のことなどよくわからず、年2回の新規入学者オリエンテーションで、保健管理センターの紹介をする時より他に、私の活躍する場は無く、委員会での大嶋先生、中島先生、佐藤先生、ミゲル先生、ヒッシェム先生らによる熱心な討議をよそに、ただ会議に参加するだけで、ほとんど役に立たないような存在でした。

留学生センターが発足してからは、それこそ留学生を我が子のように考えておられたのではないかと思うほど、親身にそして一生懸命になってセンターの管理運営に携わられた土田先生のご尽力で、小林先生、畝田谷先生、和田先生らの、優秀なスタッフがそろい、飛躍への足固めができました。大嶋先生がセンター長になられてからは、多くの大変な懸案事項を一つ一つ着実に処理されてこられているように思います。

留学生センターの大切な仕事は、留学生への日本語教育と、助言・指導を通じた生活上の支援にあると思います。この二つを基礎に、留学生が、さらに生き生きと個々の能力が発揮できるように、我々保健管理センターも微力ながら協力していきたいと思っています。